

## アントニウス会ランヴェルソ分院附属聖母聖堂の装飾プログラム考察 —造形成立における寄進者の役割

茅根紀子（早稲田大学）

トリノに程近いスーサの谷合に、ピエモンテ・ゴシックの代表作例、ランヴェルソ分院がある。附属聖堂は1188年、サヴォワ伯ウンベルト3世から聖アントニウス律修参事会（以下：アントニウス会）へと寄進されたもので、16世紀初頭まで増改築が行われてきた。建築プランは非対称で、4つのベイからなる身廊と南側廊に、聖具室を伴う内陣と後陣が加わり、聖堂北側には三つの脇礼拝堂と13世紀の鐘楼が並ぶ。かつての拝廊を被うようにファサードが増築され、その南には寄進者の個人礼拝堂を備えた15世紀の鐘楼跡が認められる。聖堂全体にゴシック壁画が残存し、当時の様子を良く残す。

本聖堂の増改築計画については、考古調査や古文書からおおよそが明らかになっており、制作者や壁画主題も多くが同定されているが、総合的な装飾プログラム解釈は試みられていない。本聖堂の装飾には、フランスとイタリア、アントニウス会とサヴォワという異質な要素が混在している。しかし先行研究では主にピエモンテ美術の枠組みから図像考察を行ってきたため、アントニウス会美術の固有性を看過している。こうした点を踏まえて本発表では、これまで発表者が調査を行ってきたアントニウス会美術並びに両アントニウス会士の人生に焦点をあて、散見される紋章表現にも注目しながら、本聖堂の装飾プログラムを検討する。

現存する建築造形・装飾は、15世紀に活躍した二人の寄進者によるところが大きい。両寄進者は、アントニウス会の要職であったランヴェルソ分院長を務めており、共に名をジャン・ドウ・モンシェニュという。ドーフィノワの名門モンシェニュ家の出身で、大叔父と甥の関係にあった。教会法の博士でもあった大叔父は、バーゼル公会議において傑出した人物として報告されている。美術制作に熱心な人物で、本分院はその中でも規模の大きな作例である。甥も美術愛好家であったようで、参事会員の身でありながらハート形の恋愛歌集を制作させており、後に素行不良のため教会から破門を受けている。

大叔父のジャンは、主にアプシス壁画と個人礼拝堂を寄進した。アプシス天井の要石にはモンシェニュの紋章が刻印され、アントニウス会とサヴォワの図像伝統が調和を見せている。寄進者像を伴った聖母子像下部には、装飾に溶け込むように無地の紋章モチーフが描きこまれ、寄進者の家系を示唆するにとどまるが、寄進者の名を冠する洗礼者ヨハネが聖アントニウスと対置される。一方彼の個人礼拝堂に描かれた《キリストの磔刑》は、有力諸侯サヴォワ公アマデウス8世を想起させる聖マウリティウスと寄進者像を伴う。その両脇には二つの紋章によってモンシェニュ家が誇示されるも、彼の自尊心は文字通り私的な空間に隠匿されている。甥のジャンは、フランス・ゴシックとピエモンテ・ゴシックの折衷様式を用いて、正面ファサードを不自然で華美なものへと改築し、天使が捧げ持つ紋章を大きく描かせるといふ、あからさまで単純な自己表出の形式を見せている。以上のことから、寄進者としての自己表出の相違が装飾プログラムに影響を与えており、中世末期の寄進者達が造形の成立に積極的な役割を果たしていた様子が具体的にうかがえる。